

シンポジウム

## オリンピア

—— 古典古代のからだところ ——

趣旨説明・司会

橋場 弦（東京大学）

報告

佐藤 昇（神戸大学）

阿部 衛（東京大学）

納富信留（東京大学）

宮城徳也（早稲田大学）

コメント

木原志乃（國學院大學）

小池 登（首都大学東京）

全体討論

2021年6月5日（土）

国際基督教大学

主催 日本西洋古典学会

## (趣旨説明)

橋場 弦 (東京大学)

古代オリンピックというテーマは、古典古代を現代に接続する数少ないチャンネルの一つである。ギリシア人・ローマ人は、古代オリンピックをどのように解釈し、受容していたのか。その背景には、どのようなイデオロギーや人間観が横たわっていたか。そして近代オリンピズムは、古代オリンピックの理解にどのようなバイアスを与えてきたのか。本シンポジウムはこれらの問題を哲学・史学・文学それぞれの視角から解き明かし、古代オリンピックという横断面に現れるギリシア・ローマ文化の相貌に光をあてようと試みる。さらには、全体討論をとおして、オリンピックが現代に投げかける問題にもなにかしかなのアプローチができれば幸いである。

## (報告要旨)

### 体育競技への眼差しと軍事

————— 変わりゆくギリシア世界の中で —————

佐藤 昇 (神戸大学)

体育競技とは、古代ギリシアの人々にとっていかなるものであったのか。後3世紀\*に『体育論』を著したフィロストラトスによれば、体育競技は元来、軍事と密接に関連するものであったという。事実、プラトーンをはじめとする古典期の作品を繙けば、体育競技はしばしば軍事活動に準えられ、その有用性が各所で示唆されている。他方、前5世紀の悲劇詩人エウリピデースの作品では、ある登場人物が、体育競技祭の優勝者など戦場ではさして役に立たぬと批判を口にしている。Trundle 2004 はこうした体育競技批判に注目し、当時の軍事戦略・用兵術の変化が批判噴出の一因になったと主張する。すなわち、戦術が変化した結果、体育競技は前5世紀後半には軍事教練としての実質的有用性を失い、それ故にこうした批判が噴出するようになったと考えている。他方、Pritchard 2010 は古典期アテーナイに焦点を絞って、体育

競技はむしろ社会から強く支持されていたと主張する。前5世紀、広範な市民が従軍経験を持つようになり（軍事の民主化）、このため、軍事と類似した体育競技は彼らから評価、支持されるに至ったというのである。これらの研究はいずれも、古典期のギリシア人を自ら軍事活動に従事する市民＝兵士と捉え、彼らが兵士の目線で体育競技を批判・評価していたと想定している。

そのように考える場合、とりわけ興味深いのはローマ帝政期のギリシアにおける体育競技言説である。体育競技をめぐる言説は、先に言及したフィロストラトスも含め、後1～3世紀の数多くのギリシア語文献に確認することができる（cf. König 2005）。そして体育競技は、そこでもまた軍事と関連づけられることが少なくない。しかしながら、周知の如く、戦乱の絶えなかった古典期やヘレニズム期などとは異なり、ローマ帝国の支配下にあったギリシア世界では、市民たちに軍事的な活躍が期待されていたとはおよそ考え難い。そのような状況下において、体育競技と軍事はいかに関連付けて語られていたのだろうか。またその背景にはどのような歴史の実態があったのだろうか。本報告では、フィロストラトスやディオーン・クリューソストモスなどの文献作品をとりあげ、作品中の体育競技言説と軍事との関係を分析するとともに、さらにエフェーボイ制度関連碑文なども利用しながら、歴史的背景について考察を進めてゆく。

\*印刷版では誤って「後2世紀」となっていました。訂正します。

## 帝政前期における競技文化

阿部 衛（東京大学）

古代オリンピックをはじめとする競技祭の研究において、ギリシア時代、とりわけ古典期におけるオリンピア祭の実態の解明にこれまで注目が集まってきた。その一方で、ローマ時代におけるオリンピア競技祭や運動競技が、議論の俎上に載せられることは、ほとんどなかった。そのため、運動競技の祭典は古典期に最盛期を迎え、その後のローマ時代になると衰退したとの見方が一般的であった。近年、このような見方に修正が加えられているものの、依然として十分な議論を経ずに「通説」として受容されているものも少なく

ない。その一つに、ローマ時代における上層民の競技離れというものがある。

これまで、競技祭に対するギリシア人とローマ人の態度は対照的であると考えられてきた。ギリシア時代において、競技祭は、市民の祭典という性格が強く、市民は日頃から競技に取り組み、公の場で競い合うことを求めた。このようなギリシア人の競争を好む姿勢は、アゴン文化と評されてきた。その一方で、ローマ時代においては、元老院議員身分や騎士身分そして都市参事会員身分などの上層民は、競技祭への出場を不名誉なこととみなす言説を多数残していることから、競技祭への出場に消極的であったと考えられてきた。このように市民が競技に取り組み、競い合うというアゴン文化は、ローマ人には引き継がれなかったとの理解が一般的である。

しかし、このような定説と相反する要素も少なくない。そのなかで、本報告では、*iuvenes* という社会集団の活動に着目する。この *iuvenes* とは、帝政期において帝国西方ラテン語圏の諸都市で確認される団体である。その構成員の大半は、地方の都市参事会員の若者であったと考えられている。この集団の活動内容およびその目的について先行研究の議論は分かれており、その扱いには慎重を期す必要があるものの、彼らが、*iuvenalia* という独自の競技祭を組織したこと、そして彼らがそこで競馬、野獣競技、そして剣闘士競技に取り組んでいたことを伝える史料もある。

本報告では、上記のローマ時代における競技者の社会階層の変化という定説を、*iuvenes* という社会集団に着目し、批判的に検証することで、ギリシア時代のアゴン文化との接続を試みたい。

## ソフィストたちのオリンピック

納富信留（東京大学）

古代のオリンピック祭典は、体育競技に特化されたものではなく、なによりもゼウス神に捧げる宗教行事であり、全ギリシアあがての文化行事であった。オリンピックに次ぐ地位にあったピュティア祭典では詩歌と音楽の競技が行われており、文化的性格が顕著であった。オリンピックにおいても、身体徳・卓越性のアゴーンをつうじて、魂の徳の涵養と発揮が目指されていた

たはずである。また、「聖なる休戦」で有名なように、オリンピックは全ギリシアの民族祭典として平和と協和を象徴する政治的意味を担っていた。

プラトンら哲学者たちも、オリンピアを訪れて競技会を見学していたが、彼らの言説を見る限り、肉体の強靭さを知恵よりも評価するオリンピックに概して批判的であった。古くはクセノファネスのエレゲイア（断片 2DK）やエウリピデスの悲劇（『アウトリュコス』断片）でオリンピック競技者への揶揄が表明されており、プラトン『ソクラテスの弁明』（36D-E）でもソクラテスは自身のポリスへの貢献を競技会優勝者と比較して「プリユタネイオンでの食事」を提案している。身体上の優劣では人間の評価にはならず、『ポリテイア』の初等教育論が示すように、ムーシケーとギュムナステイケーは相俟って魂を涵養するものであった。

哲学者とは対照的に、ソフィストはオリンピックの祭典を自身の見せ場として最大限に活用した。オリンピック優勝者のリストを作成したエリスのヒッピアスや、平和演説を行ったゴルギアス、リュシアス、イソクラテスらの活動は、オリンピックという場において成立する言論であった。直接オリンピック祭典に参加して発言した最初の三名と異なり、民族祭典を言論の場に設定して弁論作品『パネギュリコス』を書いたイソクラテスは、オリンピックの表象を活用することで自身の政治・文化理念を表明した点でより特徴的である。こういった競技場外の様子に目を配りながら、オリンピックの政治的・文化的・哲学的意義を検討したい。

（発表者は、橋場弦・村田奈々子編『学問としてのオリンピック』（山川出版社、2016年）「精神と肉体 —オリンピックの哲学」で、哲学者とソフィストのオリンピックへの態度を論じ、「浄めとしてのオリンピック —エンペドクレスの奇跡」（『三田文学』142、夏季号 2020年）で関連する問題を扱った。ご参照いただければ幸いである。）

## ローマ文学に見られるオリンピア競技会のイメージ

宮城徳也（早稲田大学）

ラテン語で書かれた文学作品で、オリンピア競技会を前提にした表現を含

む現存最古のものは、キケロ (*Sen.* 14) が引用したエンニウスの詩句か、プラウトゥスの喜劇 (*St.* 306) と思われる。ともにオリンピア競技会に言及している。エンニウスは戦車競技で活躍した馬、プラウトゥスは長距離走の選手を念頭においている。

キケロは、アッティクスに前 44 年の競技会の日程を尋ねており (*Att.* 15.25)、見学の意思があった。拳闘選手に「オリンピア競技会の勝利者」(*Flac.* 31) の語を用い、同じ語が『トゥスクルム荘対談集』で名誉と死を論じながら、一族から 3 人のオリンピア競技会勝者を出した事例を紹介した箇所が使われている (*Tusc.* 1.111)。同書ではオリンピア競技会の勝利はローマの執政官職に匹敵すると言っており、後に栄光と名誉の喩えとして用いられることを想起させる (2.141)。『神々の本性について』では、実際の戦勝がオリンピア競技会で報告されたと言っており (*N.D.* 2.6)、同競技会が年代決定の目安となることを思わせる。『国家について』でオリンピア紀の起源とそれによるローマ建国年代に言及 (*Rep.* 2.18, 28, 38) している。

韻文作品でも、オウィディウス『黒海からの手紙』(4.6.5)、マルティアリス『諷刺詩集』(4.45, 7.40, 10.23) にはオリンピック紀への言及がある。また、ウェルギリウス『農耕詩』(3.49) には栄光の象徴として「オリンピアの棕櫚」への言及があり、ホラティウスもオリンピア競技会の栄光と名誉をその詩句に活かしている (*Ep.* 1.1.50)。

以上から、ローマ人見たオリンピア競技会には、(1) 有名な行事(スポーツと宗教の祭典)、(2) オリンピック紀による歴史年代の目安、(3) 栄光と名誉の喩え、の 3 点が特に重要と思われる。他に考察したい問題として、ローマ人にとっての同時代のオリンピア競技会の意味と、古代後期のキリスト教作家がオリンピア競技会とどう考えたかの 2 点がある。前者に関しては、上記キケロの書簡の他に、スエトニウス「ネロ伝」において、ネロが同競技会に参加し、戦車競技で落馬したが、栄冠を得て、ローマ帰還後、それを披露した話 (22-25) があるが、他の事例にもあたりたい。キリスト教作家の言及ではアウグスティヌス、テルトゥリアヌス、イシドルスの言及を数カ所確認できたが、いずれも歴史年代と、栄光の喩え以上の意味は無く、可能なら異教の祭典への否定的見解を探してみたい。